

## 01 イーハートヴ基金による復興支援活動

岩手大学では、教育研究の充実や学生に対する修学支援の一層の推進を図るため、平成27年12月から「岩手大学イーハートヴ基金」を創設した。本基金は、その用途をあらかじめ特定せず幅広く本学の教育研究支援及び学生支援にご寄附頂く「一般基金」と、その用途をあらかじめ特定したうえで、ご寄附をお願いする「特定基金」で構成され、現在、企業・団体や個人の皆様など多くの方々にご支援をいただいている。

平成28年度は音楽グループ「スターダスト☆レビュー」様と岩泉町出身を中心とした「久保光義様・澤向美希様他有志33名」様から、本学の復興推進活動のために多大なる寄付をいただき、各種事業に取り組むことができた。

なお、平成28年6月6日に、陸前高田市コミュニティホールで行った「スターダスト☆レビュー」様への感謝状贈呈式では、「ア・カペラ&アコースティックフリーライブ『一緒に歌いませんか』」も同時開催され、沿岸地域の方々に「スターダスト☆レビュー」の温かい歌声と演奏を届けた。



感謝状贈呈式での記念写真  
(前列:スターダスト☆レビューのメンバーと岩渕学長)



素敵な歌声と演奏を届けてもらったフリーライブ

### ① 台風10号の被害による復興支援

台風10号により甚大な被害を受けた岩泉町、久慈市、宮古市において学生・教職員等延べ434名が泥出し作業、使用できなくなった物品の整理、流木の撤去作業等を行った。



泥出し作業(久慈市)



使用できなくなった物品の整理(岩泉町)

## ②学生の被災地でのボランティア活動

岩手大学三陸復興サポート学生委員会が陸前高田市にある「みちくさルーム」において子ども支援活動を行った。

## ③被災小学校（大船渡小学校）の野外活動支援

三陸復興部門農林畜産復興総合計画班の山本准教授と学生が中心となって、大船渡市立大船渡小学校の児童を対象に森林体験教室を開催した。この教室では、森林・林業、環境教育に関する専門知識を提供するほか、児童に対しての心のケアを意図する野外体験に取り組んだ。

## ④『だいがそこまで』の発行

学生と教員の有志岩大E\_codeが発行している陸前高田市のガイドブック。陸前高田市の魅力を広く伝えることで、大学生など若者を中心とした多くの方に陸前高田市への関心をもってもらいたい、また関心を持ち続けてもらいたい、という気持ちで作成した冊子。

岩手県内の他、イベント会場等でも配布している。



学生の旅行記を掲載し陸前高田への観光をPR

## ⑤心のケアに関する活動

心のケア班において、福島・宮城・岩手で行われている子どもへの支援活動を通して、東日本大震災のこれまでとこれからを考える「子どもの心とあゆみを支えるシンポジウム」、被災地において市民講座「こころのじかん5」を開催した。また、釜石サテライトにある被災者の心のケアを行う「こころの相談ルーム」のリーフレットを作成し、利用を呼びかけた。



子どもの心とあゆみを支えるシンポジウム



市民講座「こころのじかん5」の内容

①の岩泉町での活動は「久保光義様・澤向美希様他有志33名の皆様」、①～⑤の活動については「スターダスト☆レビュー様とファンの皆様」からのご寄付を活用させていただき実施いたしました。改めて御礼申し上げます。



## 02 台風10号に係る支援

8月30日に岩手県に上陸した台風10号の影響により岩手県沿岸部は河川決壊や土砂災害などの甚大な被害を受けた。岩手大学では被害を受けた4日後の9月2日から11月末まで、述べ434名の学生および教職員が久慈市、宮古市、岩泉町に泥出し作業などのボランティア活動に入った。

また、東日本大震災の支援活動で得た経験を踏まえ、地域防災研究センターが中心となり、被害の大きかった岩泉町の防災教育やコミュニティ支援に取り組む「岩泉支援チーム」を設置し、活動に取り組んでいる。

### ●8月30日 台風10号が岩手県に上陸し沿岸部に被害が発生

本学では宮古エクステンションセンター及び久慈エクステンションセンターの公用車が浸水した。なお、本学の復興支援活動にご賛同いただいたHonda Cars岩手中央様から車両2台の提供を受け、現在は、両エクステンションセンターの公用車として現地のニーズ収集活動に活躍している。



車両提供を受けて感謝状と記念品の贈呈  
左)菅原悦子三陸復興・地域創生推進機構長 右)小川三郎Honda Cars岩手中央代表取締役社長

### ●9月3日～ 久慈市、宮古市でのボランティア活動開始

久慈市では泥出し作業、土砂が流入した家屋の清掃、宮古市では浄土ヶ浜に打ち上げられたゴミや流木の片付け、農地の泥出し作業等の活動を行った。



市街地での泥出し作業(久慈市)



農地の泥出し作業(宮古市)

## ●9月20日～ 岩泉町でのボランティア活動開始

被害の大きかった岩泉町では、通行止めだった国道・県道が開通した9月下旬以降に、泥出し作業や使用できなくなった家財道具等の仮集積所への搬入・仕分け作業を行った。



使用できなくなった家財道具の仕分け作業(岩泉町)

## ●10月15日 台風10号緊急報告会

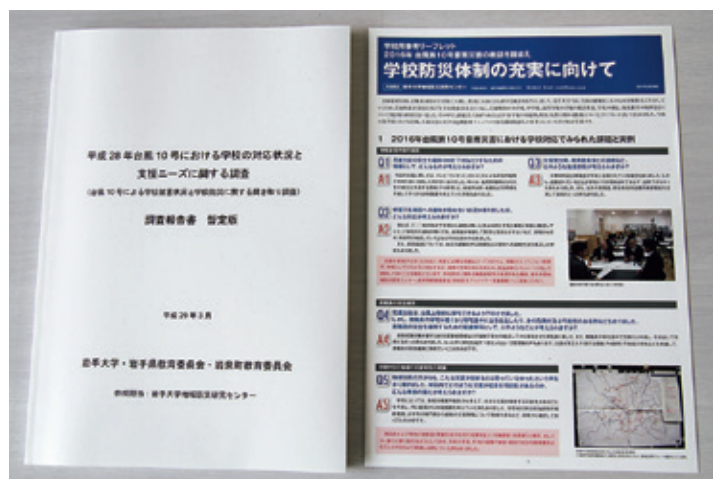
地域防災教育研究部門：地域防災研究センターでは、台風10号発生直後から久慈市、宮古市、岩泉町に入り、河川の水害調査、流木調査、土石流および土砂災害の実態調査に取り組んだ活動について報告会を開催した。東日本大震災の支援活動で得た経験を踏まえて、地域防災研究センターを中心とした岩泉支援チームを設置し、被害の大きかった岩泉町の防災教育やコミュニティ支援に取り組んでいくこととした。



報告会で説明する南センター長

## ●11月9日～ 台風10号における 学校の対応状況と 支援ニーズに関する調査

地域防災教育研究部門：地域防災研究センターでは、台風10号の経験をこれからの学校防災に活かしていくため、岩泉町教育委員会及び岩手県教育委員会と共に、岩泉町内の小中高等学校全17校の被害状況、学校の対応、防災教育の現状などについて聞き取り調査を行った。その中で課題として挙げられたことや各学校の対応例、防災・災害に関わる情報について、調査報告書とリーフレットにまとめ、岩泉町内の全学校と県内の各教育委員会に配布した。



発行した調査報告書とリーフレット



## 03 三陸復興・地域創生推進機構発足記念シンポジウム

11月25日に岩手大学復興祈念銀河ホールに於いて三陸復興・地域創生推進機構の発足を記念してシンポジウムを開催した。

岩淵明学長による主催者挨拶の後、菅原悦子三陸復興・地域創生推進機構長から、岩手大学の機能強化における震災復興・地域創生の位置づけ、更に新たに創設した機構の役割や特徴などの概要説明を行った。

次いで、坂本修一文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長の特別講演があり、オープンイノベーションについて、求められる大学の役割や加速に向けた産学共創モデルの考え方などが紹介された。

また、本田敏秋遠野市長の特別講演では、「官」の立場から人口減少のなか、国や県などに頼らず基礎自治体として出来ることに挑戦し続ける「遠野スタイル」の基本理念や個別の事例紹介、さらに岩手大学への期待が述べられた。

坂本産業連携・地域支援課長、本田遠野市長、岩淵学長による鼎談では、地域を先導する人材やリーダーシップの重要性、地域の社会システムを変えるイノベーションの必要性、地域を変革するための大学の役割について忌憚のない意見が交わされ、地域創生における大学の重要性が再認識された。



機構の概要説明を行う菅原機構長



他会場では取組についてパネルや映像で紹介

三陸復興・地域創生推進機構発足記念シンポジウム次第

- 開会の辞
- 学長挨拶 岩手大学長 岩淵明
- 三陸復興・地域創生推進機構説明  
岩手大学理事・副学長/三陸復興・地域創生推進機構長  
菅原悦子
- 特別講演Ⅰ  
「文部科学省のイノベーション政策展開の方向性」  
文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長  
坂本修一氏
- 特別講演Ⅱ  
「『遠野スタイル』によるまちづくり2016」  
遠野市長 本田敏秋氏
- 鼎談「地域創生における大学の役割」  
文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長  
坂本 修一氏  
遠野市長 本田 敏秋氏  
岩手大学長 岩淵 明
- 閉会の辞

**岩手大学三陸復興・地域創生推進機構  
発足記念  
シンポジウム**

2016.11.25(金)  
14:30~17:00 (受付 14:00)  
岩手大学復興祈念銀河ホール  
(〒020-8551 盛岡市上田町目 3-5)

岩手大学は東日本大震災以降、被災県である  
立大学として地域の復興推進・支援の役割を担う  
ことを使命としてきました。第三の創生期(復興期)  
においても、復興支援活動の継続などにより「地域  
を先導する」大学を目指し、三陸復興推進及び地域  
連携事業を長期的に継承する体制として、平成28  
年4月に「三陸復興・地域創生推進機構」を創設し  
ました。

この機構は、東日本大震災の被害と人口減少  
化にある岩手県の豊多・3化・1化の中核を担い  
、人口減少と産業衰退が深刻化する地域における  
地域創生モデルの構築、教育研究への活用など  
に創けた連携を軸にもつことにより、地域創生の機  
能に貢献することを目的としています。

「三陸復興・地域創生推進機構」発足に際し、記  
念シンポジウムを開催いたしますので、皆様のご参加  
をお待ちしております。

14:30	開会の辞	岩手大学長 岩淵 明
14:35-14:45	学長挨拶	岩手大学理事・副学長 菅原 悦子
14:45-15:05	三陸復興・地域創生推進機構説明	岩手大学理事・副学長 菅原 悦子
15:10-15:40	特別講演Ⅰ	文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域支援課長 坂本 修一氏
15:45-16:15	特別講演Ⅱ	遠野市長 本田 敏秋氏
16:25-16:55	鼎談「地域創生における大学の役割」	文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域支援課長 坂本 修一氏 遠野市長 本田 敏秋氏 岩手大学長 岩淵 明
17:00	閉会の辞	
17:15-19:00	記念祝賀会	会場：理工学部教室

鼎談「地域創生における大学の役割」【抜粋】

文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長 坂本 修一 氏  
遠野市長 本田 敏秋 氏  
岩手大学長 岩淵 明

1. 自治体の取組に、より良い刺激や助言を与えるパートナーシップを



「震災」が、我々の一つの大きいターニングポイントとなりました。「大学もやれるところをやりましょう」と。  
単独で取り組む時代は限界だということは、明白だと思います。単に大学が学問を教えるだけではなく実践を通して「課題は何なのか」を自分たちで見つける。そこからどう発展させるか。そういう中で大学も変わって行かざるを得ない。  
地域と大学がどういうふうに関連していくか「学」の役割というのを考えたい。



計画を進める上で、岩手大学の先生方に全てにおいてアドバイス頂くのではなく、遠野市として、この部分は我々で何とかやれるが、この部分は岩手大学の先生方からいろいろな形でご指導を頂こうと。  
「学」の力により、豊かな自然や伝統的な文化が再認識されると我々も「やっぱり大事にしなければならない」と地域が一つの力になっていくと思います。

## 2. 若者が新分野に挑戦しやすくなる環境づくりや支援の仕組みを



坂本課長

とりあえずやってみる。更に、上の人たちが温かく見守るようなシステムなりカルチャーが必要。  
「とりあえずやらせてみようよ、やってみようよ」という雰囲気づくりは、イノベーションを起こすのに必ず必要。

岩淵学長

地域を変えていくためには、新しいシステムを作り上げていくリーダーもいないといけない。リーダーも変わっていかなければならない。

## 3. 人命に関わるような重大な場面でリーダーが適切に判断を下すための倫理基準や、若者の新分野挑戦への環境づくりなどに「学問」が力を発揮すべき

坂本課長

正義とか倫理とか人間のあるべき姿はどうあるべきか。こういうことこそ学問が説くべきだというのは、今まさに世界中で議論されている大学のあり方が問われている所。  
リーダーが、本当に人命がかかっているような重い判断をする時、どういう情報で何を基準に判断したらいいか、そういう所も学問の大きな役割。  
自治体は何を求めている、大学は何が出来そうかということの本音で議論して頂く。いろいろな階層でコミュニケーションするというのを是非やって頂きたい。

本田市長

岩手大学と我々市町村が協定を結んで定期的に意見交換する場があります。そのような際に先生方、学生、首長も入る。さらに市町村の議会議員を巻き込む仕掛けがあればいい。  
市町村長も産学官そして金労言（事務局注：金融、労働、言論）ということであれば、その仕組みの中で、それぞれ地域の60点を70点80点に持っていくためにみんなで頑張りましょう、という環境を作る。「学」の立場でその役割を持ってもらえればと思います。

## 4. 人づくり、地方イノベーションの推進のため地域の魅力をどう高めていくか

坂本課長

ちょっとしたツールと使える知識、あとはやる気ですね。そういうものを持った人材を大学は送り込んで、それを指導する先生も送り込んで現場の方々と一緒にやる。課題解決に取り組む。

本田市長

交流人口を定住、移住にシフトさせたい場合には、やはり受け入れる我々の方が自信や誇りを持たなければいけない。その自信と誇りをどう持たせるかは、実は若い方々・学生さん方の力というのは大きい。  
学生のパワー、若い方々のパワーをどのように我々が受け入れながら、それを魅力に繋いでいく仕組みに持っていかなくてはすごく大事。



## 5. フィールドから学び、実践を通して考えていくことが地方創生における大学の役割

本田市長

市町村と産学官、それに金労言というものをどのように縦と横の糸にするか、縦糸と横糸がすっかり噛み合えば紐じゃないんですね、布になるんです。そうするとほとんどが壊れない。壊れない組織になるということです。

坂本課長

人口構造の変化は既に起こっているわけですが、それが一体社会に産業構造に何をもちたらすかというのはなかなか読めないところがあるんです。それを学問的アプローチ、社会学なのか政治学なのか哲学なのか法学なのか、そういうところで学問としてそれを示し、それに備えるために行政は、産業界は何をしていくべきかを提示していくのは、やはり学問なんですね。

岩渕学長

我々は「実践」の中から得た知見を教育の中に反映させるように頑張っていきますので、今後も文科省はじめ地域の自治体も宜しくご支援頂きたいと思います。本日はどうもありがとうございました。



本田遠野市長(左)、坂本産業連携・地域支援課長(中央)、岩渕学長(右)による鼎談

■ 鼎談の詳細はこちらから

岩手大学ホームページ「外部有識者と学長との対談」<http://www.iwate-u.ac.jp/shokai/taidan/>



## 04 三陸復興・地域創生推進機構首都圏向け報告会

### 「岩手大学の新たな挑戦～岩手の“大地”と“ひと”と共に～」

12月11日に水産分野で連携している東京海洋大学品川キャンパスにおいて三陸復興・地域創生推進機構首都圏向け報告会「岩手大学の新たな挑戦～岩手の“大地”と“ひと”と共に～」を開催した。

東日本大震災から5年9ヶ月が経過し、震災の記憶が風化する首都圏において、三陸復興・地域創生推進機構として復興状況や現在の課題を幅広く紹介する初めての報告会である。

当日は、同窓生や三陸地域出身の首都圏在住者、被災地で復興支援活動に携わった方など多数ご来場いただいた。

岩渕学長が震災復興・地域創生に向けた取組や次世代を担う人材の育成の取組などを紹介し、三陸復興・地域創生推進機構長である菅原復興・地域創生担当理事は機構の概略と三陸地域における平成28年度の具体的な復興支援活動などを説明した。

また学生の取組事例として、「住民のところに寄り添う」を理念に掲げ、子どもの遊び場づくりや仮設住宅でのコミュニティ支援に取り組んでいる「三陸復興サポート学生委員会」と、陸前高田市や大槌町のお祭りを支援する「地域の祭りを盛り上げ隊」の2団体からそれぞれの活動を発表した。来場者からは、「参加するお祭りの起源などを調べれば、より深く地域と関われるのではないか」など、今後活動する上で有益なアドバイスをいただき、学生にとっても良い刺激となった。

最後に地域コミュニティ再建支援班長を務めている広田教授が高台移転等に伴う地域の再編問題や災害公営住宅でのコミュニティ形成、さらに大槌町における総合的コミュニティ形成支援について具体的な事例を踏まえた講演を行った。

同班の船戸特任研究員からは、大船渡市の災害公営住宅で行っている自治会設立支援への取り組みについて実際に現地で撮影した動画を活用して説明を行った。

意見交換の時間では、来場者から、現地の公共交通機関の復旧状況、台風10号被災地域における岩手大学の今後の具体的な活動内容などの質問や自然豊かな三陸地域の観光資源を活用した観光分野の提案など多様な御意見をいただき、岩手大学への期待の高さがうかがわれた。



挨拶を行う岩渕学長



展示・上映会場



三陸復興サポート学生委員会



地域の祭りを盛り上げ隊

なお、会場では学外の方々の意見を今後の活動に広く取り入れるため、岩手大学三陸復興・地機創生推進機構サポーターの募集も行った。

■ サポーター登録の申込先

地域創生推進課 TEL: 019-621-6629 FAX: 019-621-6656 MAIL: sanriku@iwate-u.ac.jp

岩手大学三陸復興・地域創生推進機構首都圏向け報告会次第

- 挨拶  
岩手大学長 岩淵明
- 三陸復興・地域創生推進機構の紹介  
岩手大学理事・副学長/三陸復興・地域創生推進機構長 菅原悦子
- 学生の取り組み発表①  
三陸復興サポート学生委員会
- 学生の取り組み発表②  
地域の祭りを盛り上げ隊
- 会場からの質疑応答①
- 講演  
「被災地の現状と新たな挑戦」  
農学部教授/三陸復興・地域創生推進機構三陸復興部門  
地域コミュニティ再建支援班長 広田純一
- 会場からの質疑応答②

【報告会概要】  
岩手大学は半世紀以上、これまでの被災地復興復興活動を通じて、三陸復興・地域創生推進機構を推進し、被災地の三陸復興と、被災者の「まち・ひと・しごと」の創造に、力を尽くしてまいりました。多岐にわたる被災地再生の取組を通じて、岩手大学の今後の方向性を示すことにも、品川キャンパスの地域創生推進機構を通じて、被災地の復興と、被災者の「まち・ひと・しごと」の創造に、力を尽くしてまいりました。

【被災地の現状と新たな挑戦】  
被災地の現状と新たな挑戦について、岩手大学の先生方から、被災地の復興と、被災者の「まち・ひと・しごと」の創造について、詳しくお話を伺います。

【質疑応答】  
質疑応答の時間です。ご質問を歓迎いたします。

【会場からの質疑応答①】  
会場からの質疑応答の時間です。

【会場からの質疑応答②】  
会場からの質疑応答の時間です。

【その他】  
会場からの質疑応答の時間です。